

大伴家持「悲世間無常歌」の成立背景

佐藤 隆
(本学教授)

一 はじめに

家持は、天平勝宝二年（七五〇）三月に様々な種類の作品を詠出している。筆者は春苑桃李歌（19四一三九〜四〇）を初めとして、三月三日上巳当日までの歌群（19四一三九〜五三）について、桃花と桜花を基礎に拙論を展開したことがある。本稿では、その三日から六日後の「季春三月九日に、出挙の政に擬りて、旧江村に行く」折りの、「興の中に作る所の歌」と題される四首から成る歌群（19四一五九〜六五）の中から、「世間の無常を悲しぶる歌」（19四一六〇〜六一）について論究する。

家持は、無常に関心を持ち、万葉集に何首かの作品を載せていることは周知であり、既に拙論にても確認した。その家持の無常歌群における当該歌の制作背景とその位置を確認し、あわせて家持の文芸観についても触れたい。

二 当該歌

当該歌は、

悲世間無常歌一首 并短歌
 天地之遠始欲 俗中波 常無毛能等 語續 奈我良
 倍伎多礼 天原 振左氣見婆 照月毛 盈吳之家里 安
 之比奇能 山之木末毛 春去婆 花開尔保比 秋都氣婆
 露霜負而 風交 毛美知落家利 宇都勢美母 如是能未
 奈良之紅能 伊呂母宇都呂比 奴婆多麻能 黒髪變
 朝之咲 暮加波良比 吹風能 見要奴我其登久 逝水能
 登麻良奴其等久 常毛奈久 宇都呂布見者 尔波多豆美
 流 淳 等騰米可祢都母
 言等波奴 木尚春開 秋都氣婆 毛美知遲良久波 常乎
 奈美許曾 一云 常无傘等曾
 宇都世美能 常无見者 世間尔 情都氣受豆 念日曾於
 保伎 一云 嘆日曾於保吉
 (19四一六一)
 (19四一六一)
 (19四一六一)

である。長歌は、初めの冒頭部「天地之 遠始欲 俗中波
常無毛能等 語續 奈我良倍伎多礼」によって「俗中」(世
間)のツネナキモノを詠出し、「天原 振左氣見く風交 毛
美知落家利」までの前半部で具体例を挙げて「天地自然の無
常」を、それを受けた「宇都勢美母 如是能未奈良之く常毛
奈久 宇都呂布見者」の後半部でやはり具体例を挙げて「人
事の無常」を詠出するという二部構成になっている。そし
て、結句部の三句では、主観的叙情的に詠い納めている。た
だし、当該歌を含む四首から成る歌群をふまえる時、家持が
無常を実感し悲嘆にくれての制作と即断すべきではないと考
える。

なお、短歌も第一首目で「天地自然の無常」を、第二首目
で「人事の無常」を詠出する構成となっている。

当該歌が生まれた天平勝宝二年(七五〇)三月の家持作品
を、題詞から概観すると、

3月1日 天平勝宝二年三月一日の暮に、桃李の花を詠

む歌二首 (19四一三九〜四〇)

翻び翔る鴨を見て作る歌一首 (19四一四一)

3月2日 三月二日に、柳黛を攀ぢて、京師を思ふ歌一

首 (19四一四二)

堅香子草の花を攀ぢ折る歌一首

(19四一四三)

帰雁を見る歌二首 (19四一四四〜四五)

夜の裏に千鳥の喧くを聞く歌二首

(19四一四六〜四七)

暁に鳴く雉を聞く歌二首

(19四一四八〜四九)

江を浜る舟人の唱を遙かに聞く歌一首

(19四一五〇)

3月3日 三日、越中守大伴家持が館に宴する歌三首

(19四一五一〜五三)

3月8日 八日、白き大鷹を詠む歌一首

(19四一五四〜五五)

鷗を潜くる歌一首 (19四一五六〜五八)

3月9日 季春三月九日に、出挙の政に擬りて、旧江村

に行く、道の上にして物花を属目する詠、并

せて輿の中に作る所の歌

洪谿の崎に過り、巖の上の樹を見る歌一首

(19四一五九)

樹の名はつまま

(19四一六〇〜六一)

予め作る七夕の歌一首 (19四一六三)

勇士の名を振るはむことを慕ふ歌一首

(19四一六四〜六五)

右の二首、山上憶良臣の作る歌に追和
す。

3月20日 霍公鳥と時の花とを詠む歌一首

(19四一六六〜六八)

右、二十日に、未だ時に及らねども、興に依り予め作る。

家婦が京に在す尊母に贈らむために、詠へられて作る歌一首 (19四一六九〜七〇)

3月23日

二十四日は立夏四月の節に応る。これに因りて二十三日の暮に、忽ちに霍公鳥の暁に喧かむ声を思いて作る歌二首

(19四一七一〜七二)

京の丹比の家に贈る歌

(19四一七三)

3月27日

筑紫の大宰の時の春苑梅花の追和する一首

(19四一七四)

右の一首、二十七日に興に依りて作る。

となる。卷十九は不思議なことに、天平勝宝二年の正月から始まっていない。正月や二月の作品(18四一三六〜三八)は卷十八に配列され、三月一日から三日までの三日間連続に詠出された作品群より始まっている。また、四月十二日に至るまでは、家持自身の作品だけで成り立っており、他人の作品が含まれてない。家持歌集の色彩が濃厚な部分であること留意すべきであろう。

三 作品群と「興」・大伴池主

天平勝宝二年三月の作品群の題詞には、興味ある語が重出している。それは、

……物花を属目する詠、并せて興の中に作る所の歌

(19四一五九題)

右、二十日に、未だ時に及らねども、興に依り予め作る。

(19四一六六左)

右の一首、二十七日に興に依りて作る。

(19四一七四左)

である。当該歌題詞にもみられる語である。「興」については、早く小野寛氏の「家持の依興歌」があり、「家持の文芸―『春愁の歌』の誕生―」がある。

家持の「興」は現実から離れて想像の世界を描こうとする心だと言えるだろう。「興」は家持独自の文学を生み出す意識を示すことばであった。

と家持の文学観から説いた。それに対して橋本達雄氏は、「二上山の賦をめぐって」において、集中の依興歌十例を通観し、

「依興」なる語は、家持の胸奥にはそれなりの脈絡もあり、必然もあるのだが、普通に見るといかにも唐突でその場その折にそぐわないと思われるような状況で発した

感興を述べた歌に対してつけられているのである。熟さぬ言葉だが、いわば「非時性」とでもいうべき性格を持つ歌に一貫している。

として、文学の意識を示すことばとする小野説に反駁している。筆者は、家持が天平十三年四月の弟書持に報える三首（17三九一〇〜一三）に、既に中国の「詩学」と並ぶ、倭の「歌学」が構築しはじめ、「歌学」を自覚的に捉えていたと考えているので、小野説に近い。

したがって、家持における「興」は、無意識に用いられた用語ではなく、家持の歌学に基づいた用語であると考える。家持は「興」の語を持ち出すことによって、時空を超越した文芸空間の創出を可能にし、作品を形成していると考えられる。それが当該歌を含む無秩序とも思われる作品形成を可能にしていると推察するが、「興」についてはこのぐらいにして、別稿に譲る。

さて、家持は道の辺で属目したツママの木を詠出し、突如「興」から当該歌の世間の無常を詠出する。この落差の問題については諸説あり、『全注』（青木）がそれをまとめている。特に橋本達雄氏の「天平勝宝二年三月、出挙の歌」を挙げ、旅人亡妻歌との強い影響関係を指摘し、その旅人から憶良も想起して当該歌に続くとする。また、鉄野昌弘氏はツママの恒常との対照としての世間無常の自然推移が導き出されたとする説も指摘している。両氏の指摘する要因が混在してい

たとすべきであろう。

一方、辰巳正明氏は、三月一日から三日までの濃密な作品群形成の背景に注目し、大伴池主との交友関係の中で説く。氏は、家持には独特な「家持暦」とも言うべきものがあること。また、天平十九年春上巳前後に家持と池主との琴瑟相和する作品群があることに注目し、その文芸空間の再現を夢想していたとする。そして、天平勝宝二年春の上巳はそれを想起させる折りで、家持は異常な興奮状態にあったとする。それが、三月一日から三日間の作品形成の原動力になっているとし、巻十九が三月から始まる要因にもなったとする。池主との文芸交友関係から言及した新見である。筆者も天平十九年の家持と池主との濃密な文芸交流について言及したことがあり、その延長上に想定され、傾聴すべき論であると考え

さて、前記の題詞を見るに、家持はそのような興奮状態の三日間を過ぎた五日後の八日に、鷹の作品を詠出し、続いて鶉の作品を詠出している。この鷹の作品にも注意が必要である。鷹の作品成立の背景にも池主の存在がある。「放逸せる鷹を思ふ歌」（17四〇一一〜一五）において、既に家持は池主を強く意識し、池主を背景において作品を制作していたからである。家持の心には歌友池主の存在が大きかったと推察される。

そして、翌九日には出挙の政に出発し、渋谿の崎の磯の上

に生えたツママの木を詠み続いて、当該歌の「世間の無常」を詠み、憶良に追和して「七夕歌」や「勇士の名」を詠んでいることになる。

その旺盛な詩的感興と作品制作のエネルギーに驚かされる。家持を突き動かす何かがあったのである。諸注が指摘するように憶良の存在は大きい、辰巳氏が指摘する如く、「家持暦」や歌友池主の存在がその根底にあったことは、見逃すことのできない重要事項と考える。

四 憶良と「常無」

当該歌は、集中特異な主題である「世間の無常」に向き合っている。世間の実例をそれぞれ挙げ、それぞれが移ろい、常では無いとする。このような無常歌の成立を家持はどのようにして可能にしたのであろうか。『注釈』が、

この作は憶良の「哀世間難住歌」(五・八〇四)を學んだものと思はれ、この語もその中に用ゐられた古語を用ゐたものであらう。

とし、『全注』(青木)や『釋注』が従うように、やはり、憶良やその歌の影響を無視することはできない。当該歌の直後の二作品の左注にも「右の二首、山上憶良臣の作る歌に追和す。」とあって、当時家持は明らかに憶良を意識下において作歌活動をしていたからである。

その憶良歌とは、

世間の住み難きことを哀しぶる歌一首 并せて序

集まること易く排ふこと難くは、八大の辛苦、遂ぐる
こと難く尽くること易きは、百年の賞樂なり。古人の
歎くところ、今もまたこれに及ぶ。所以に因りて一章
の歌を作りて、二毛の歎きを撥はむ。その歌に曰く、
世間の すべなきものは 年月は 流るるごとし とり
続き 追ひ来るものは 百種に 迫め寄り来る 娘子ら
が 娘子さびすと 唐玉を 手本に巻かし (或はこの
句あり、云はく、「白たへの 袖振り交し 紅の 赤裳裾引
き」) よち子らと 手携はりて 遊びけむ 時の盛りを
留みかね 過ぎし遣りつれ 蜷の腸 か黒き髪に いつ
の間か 霜の降りけむ 紅の へに云ふ、「丹のほな
す」 面の 上に いづくゆか 皺が来りし へに云
ふ、「常なりし 笑まひ眉引き 咲く花の 移ろひにけり 世
間は かくのみならし」 ますらをの 壮士さびすと 劍
太刀 腰に取り佩き さつ弓を 手握り持ちて 赤駒に
倭文鞍うち置き 這ひ乗りて 遊びあきし 世の中や
常にありける 娘子らが さ寝す板戸を 押し開き い
辿り寄りて ま玉手の 玉手さし交へ さ寝し夜の い
くだもあらねば 手束杖 腰にたがねて か行けば 人
に厭はえ かく行けば 人に憎まえ 老よし男は かく
のみならし たまきはる 命惜しけど 為むすべもなし

反歌

(580四)

常磐なす かくしもがもと 思へども 世の事なれば
留みかねつも (580五)

神亀五年七月二十一日に嘉摩郡にして撰定す。筑
前國守山上憶良

である。この憶良歌の内容と表現が、当該歌と重なることは明らかであろう。ただし、表現を詳細にふまえるとき注目すべきことがある。それは憶良歌の前半部「娘子ら」の老いを表現する部分が、当該歌に直接影響を与えているのであるが、それは当該歌の後半部の「人事の無常」の世界の表現と重なっているのであって、前半部の「天地自然の無常」とは重なりあわず、当該歌全体に及んでないことである。

たしかに憶良歌では、「一に云ふ」として「常なりし 笑まひ眉引き 咲く花の 移ろひにけり 世間は かくのみならし」の案を示し、そこに「自然の無常」に繋がる「咲く花の移ろひにけり」の語をみることが出来る。しかしそれは娘子らの「常なりし笑まひ眉引き」に関わるものであって、「人事の無常」を表出するために用いられているのである。

つまり、前述したように、当該歌は二種の具体例を採り入れて二部構成の手法を採用している。憶良世界は、後半部の「人事の無常」の世界と深く関わりあっている、前半部の「天地自然の無常の世界」の世界とは関わっていないのである。

る。家持は「天地自然の無常」の世界をどの様に獲得したのであろうか。この点を明確にしなければ、当該歌の全体を把握することはできないのである。

五 青年時代の家持と「常無」

そこで家持作品の中で、当該歌のような無常歌の要素を包括する作品を確認することにすると、まず、

十一年(七三九)己卯の夏六月に、大伴宿禰家持が
亡すぎにし妾をみなめを悲傷して作る歌一首

今よりは秋風寒く吹きなむをいかにかひとり長き夜を寝
む (346二)

をこひと 弟大伴宿禰書持が即ち和ふる歌一首

長き夜をひとりや寝むと君が言へば過ぎにし人の思ほゆ
らくに (346三)

また家持、砌の上の瞿麦が花を見て作る歌一首

秋さらば見つつしのへと妹が植ゑしやどのなでしこ咲き
にけるかも (346四)

朔移りて後に、秋風を悲嘆して家持が作る歌一首

うつせみの世は常なしと知るものを秋風寒み偲びつるか
も (346五)

また家持が作る歌一首 并せて短歌

我がやどに 花そ咲きたる そを見れど 心もゆかず

はしきやし 妹がありせば 水鴨みかもなす 二人並び居 手
折りても 見せましものを うつせみの 借れる身なれ
ば 露霜の 消ぬるがごとく あしひきの 山道をさし
て 入日なす 隠りにしかば そこ思ふに 胸こそ痛き
言ひもえず 名付けも知らず 跡もなき 世の中なれば
せむすべもなし (三四六六)

時はしも何時もあらむを心痛くい行く我妹か若子を置き
て (三四六七)

出でて行く道知らませばあらかじめ妹を留めむ関も置か
ましを (三四六八)

妹が見しやどに花咲き時は経ぬ我が泣く涙いまだ干なく
に (三四六九)

悲緒未だ息まず、更に作る歌五首

かくのみにありけるものを妹も我も千歳のごとく頼みた
りけり (三四七〇)

家離りいます我妹を留めかね山隠しつれ心どもなし
(三四七一)

世の中し常かくのみとかつ知れど痛き心は忍びかねつも
(三四七二)

佐保山にたなびく霞見ること妹を思ひ出で泣かぬ日は
なし (三四七三)

昔こそ外にも見しか我妹子が奥つきと思へば愛しき佐保
山 (三四七四)

の亡妻歌群があげられる。ここでは、旅人の亡妻歌群の影響
下において、愛する者の死を題材とし、その哀惜の情を無常
観を背景に詠出しているのであるが、一方、「秋風」や「な
でしこ」と言った自然にも目を向け、第三首目の短歌(三四
六五)においては、「世は常なしと知る」が「秋風寒み偲び
つるかも」と、「無常」と自然の「秋風」と言う組み合わせを
用い出して詠出していることが注意される。

その家持は、

十六年(七四四) 甲申の春二月、安積皇子の薨ぜし
時に、内舍人大伴宿禰家持が作る歌六首

かけまくも あやに恐し 言はまくも ゆゆしきかも
我が大君 皇子の命 万代に めしたまはまし 大日本おほやまと

久邇の都は うちなびく 春さりぬれば 山辺には 花
咲きををり 川瀬には 鮎子さ走り いや日異に 栄ゆ

る時に 逆言およつれの 狂言たはごととかも 白たへに 舍人よそひて
和東山 御輿みこし立たして ひさかたの 天知らしぬれ こ

いまろび ひづち泣けども せむすべもなし
(三四七五)

反歌

我が大君天知らさむと思はねばおほにそ見ける和東山
(三四七六)

あしひきの山さへ光り咲く花の散りぬるごとき我が大君
かも (三四七七)

右の三首、二月三日に作る歌。

かけまくも あやに恐し^{かし} 我が大君 皇子の命 ものの
 ふの 八十伴の男を 召し集^{つど}へ 率^{あども}ひたまひ 朝狩に
 鹿猪踏^しみ起こし 夕狩に 鶉雉踏^{とり}み立て 大御馬^{おほみま}の 口
 抑へ止め 御心^{みこころ}を 見し明らめし 活道山^{いくぢやま} 木立の茂に
 咲く花も 移ろひにけり 世の中は かくのみならず
 ますらをの 心振り起こし 剣大刀 腰に取り佩き 梓
 弓 鞞^{ゆき}取り負ひて 天地と いや遠長に 万代に かく
 しもがもと 頼めりし 皇子の御門の 五月蠅^{ばへ}なす 騒
 く舎人は 白たへに 衣取り着て 常なりし 笑まひ振
 舞 いや日異に 変はらふ見れば 悲しきろかも
 (三四七八)

反歌

愛しきかも皇子の命のあり通ひ見しし活道の道は荒れに
 けり
 (三四七九)

大伴の名に負ふ鞞帯びて万代に頼みし心いづくか寄せむ
 (三四八〇)

右の三首、二月二十四日に作る歌。

の安積皇子挽歌において、花と無常との組合わせを強めてい
 る。三日の反歌では、皇子の死を咲く花の散ることで詠出す
 るにとどまっているが、二十四日の長歌では「咲く花も移ろ
 ひにけり世の中はかくのみならず」と詠出し、明確な自然と
 無常との組合わせの中で句が成立している。身崎壽氏は、

「安積皇子挽歌 その(一・二)」の論において、

世の中は かくのみならず

は、「哀世間難住歌」(巻五)の長歌(八〇四)の異伝の
 一節、

咲く花の 移ろひにけり 世の中は かくのみなら
 し

をはじめ、山上憶良の諸作品に類似の表現をおおくみる
 ことができる。とりわけこの一節は、「咲く花の 移ろ
 ひにけり」ともあって、さきにあげた安積の死を暗示す
 る「咲く花も 移ろひけり」との関連が推測されること
 ろだ。また、家持自身すでに天平一年制作の「悲傷亡
 妾歌」群中の一首(四七二)において、

世の中は常かくのみとかつ知れど

とうたっており、それがすくなくとも家持にとっては挽
 歌的色彩をおびた語句だったことが推測される。だがこ
 のような表現は、いわゆる宮廷挽歌のたぐいにはたえて
 みられない。こうした発想・表現はむしろ新来の仏教思
 想に触発されてうまれた可能性もあり、宮廷挽歌の表現
 伝統からいえばむしろ異質なものということができると
 ではないだろうか。

としている。宮廷挽歌の表現伝統からの語でなく、やはり、
 家持が創出した独自の表現として留意すべきであろう。

六 越中守時代の家持と「常無」

さて、家持にはこの安積皇子挽歌に類似する表現がある。

家持が越中守として赴任したその翌年の天平十九年春、枉疾に沈んだ時の作品に、

忽たちまちちわうしつに枉疾わうしつに沈み、殆ほとほと泉路に臨む。仍よりて歌詞を作り、以て悲緒ひしよを申ぶる一首并せて短歌

大君の 任けのまにまに ますらをの 心振り起こし
あしひきの 山坂越えて 天離る 鄙ひなに下り来 息だに
も いまだ休めず 年月も 幾らもあらぬに うつせみの
世の人なれば うちなびき 床に臥い伏し 痛けく
し 日に異に増さる たらちねの 母の命の 大舟の
ゆくらゆくらに 下恋に いかも来むと 待たすらむ
心さぶしく はしきよし 妻の命も 明け来れば 門に
寄り立ち 衣手を 折り返しつつ 夕されば 床打ち払
い ぬばたまの 黒髪敷きて いつしかと 嘆かすらむ
そ 妹も兄も 若き子どもは をちこちに 騒き泣くら
む 玉梓の 道をた遠み 間使まつかひも 遣るよしもなし
思ほしき 言伝て遣らず 恋ふるにし 心は燃えぬ た
まきはる 命惜しけど せむすべの たどきを知らに
かくしてや 荒し男すらに 嘆き伏せらむ

(17三九六二)

世の中は数なきものか春花の散りのまがひに死ぬべき思へば (17三九六三)

山川のそきへを遠みはしきよし妹を相見ずかくや嘆かむ

(17三九六四)

右、天平十九年春二月二十日に、越中国守の館むろつみに病やまひに臥して悲傷び、聊かにこの歌を作る。

とある。注意すべきは第一短歌において、安積皇子挽歌の場合のようにたんに「咲く花」とするのではなく、「春花」と季節を明確に提示した語を彼の詩囊から選択している。そして、観念世界にて「世の中は数なきもの」と世間の無常を明確に把握しながら、同時に現実の視覚世界を背景に「春花の散りのまがひに」と春花の散る様子の中にも同様の無常をみて一作品として詠出している。世間の無常と春花の無常との深い相互関係の中で詠出していることである。

当該歌の詠出基盤には、月を用いて「照る月も満ち欠けしけり」とする詠出に代表される様に、満ちることから欠けることへのツネモナクウツロフことが基軸にある。このツネモナクウツロフことを基盤に、この天平十九年春の「春花の散りのまがひに死ぬべき思へば」の詠出世界を、春に限定せず季節の代表である春秋に開けば、当該歌の「春されば 花咲にはひ 秋付けば 露霜負うひて 風交じり 黄葉散りけり」の前半部の「自然の無常」の世界に繋がるかと推察する。

なお、世間無常を背景に置く歌は、早く柿本人麻呂の亡妻

歌(2210)にみる事ができる。また、妻の亡くなる様子を「渡る日の暮れぬるがごと 照る月の雲隠ること 沖つ藻の なびきし妹は もみち葉の 過ぎて去にき」(2217)と自然界を利用して詠出もしている。その主眼は妻の死の描写にあった。

以上のように家持の作品を確認してみると、青年時代の十一年からの無常に向き合う姿勢が明らかになる。そして、亡妻や安積皇子という第三者に対して無常観を採り入れながら作品を制作した家持は、越中守として任地に赴いた。そこで大病に倒れ、我が身の実体験から捉えた無常観を、天地自然と人事の両面から意欲的に作品化したと推察する。

また注意すべきは、この「枉疾に沈み泉路に臨む時の歌」は、けっして家持自身の歌集に収まるものでなく、人に披露することをも意図した作品であることである。家持と池主は天平十九年春に盛んに作品を贈答し、唐の詩友関係に習い、文芸の友として交友関係を深めている。その明確な初めは「家持、池主に贈る悲しみの歌」(1739六五・六)であるが、その歌を詠出する契機になったのは前文に「忽ちに枉疾に沈み、累旬痛み苦しむ。」と記されたように、直前に位置する天平十九年春の「枉疾に沈み泉路に臨む時の歌」であった。家持は「枉疾に沈み泉路に臨む時の歌」から始まる作品群を池主に贈ったと推察する。家持が池主を意識して制作した「枉疾に沈み泉路に臨む時の歌」が、やはり池主を意識する

無常を詠出する当該歌制作時において、大きな影響を与えたと推察する。

したがって、当該歌前半部の天地自然の無常の中の「自然の無常の世界」の獲得はこの様な池主との交友関係の事情が介在していたと推察する。

つまり、家持は当該歌の無常世界を詠出するにあたり、文芸の友池主と深く関わる「枉疾に沈み泉路に臨む時の歌」を想起するとともに、憶良の「哀世間難住歌」を想起して作品形成をはかったと推察する。従来諸説が説くように、憶良歌のみからの影響ではないと考える。

なお、家持には当該歌以後の家持の常無歌としては、天平勝宝八歳(七五六)六月一七日の「族を喩す歌一首」(20四四六五〇七〇)がある。家持の無常歌に対する執着度が明らかであるが、その詠出意図や内容は当該歌とはことなる。

七 おわりに

家持は、憶良により学んだ人事の無常に、池主と交友を有することで自身が獲得した自然の無常を加えて一作品を成したと考える。憶良の存在によって詩的感興を持ち、池主との世界を加えて作品に至っているのである。

そして、この当該歌を制作したことが、直後の「山上憶良臣の作る歌に迫和す。」一作品へと向かわせたのである。つ

まり、当該歌は、池主への意識と憶良への意識が合体した結果に成立した作品であり、また、池主から憶良に転換する重要な位置にあったということになる。

もちろん、当該歌は家持の文芸制作意識よって作品として制作されたのであって、けっして、仏教的無常に拘泥して制作したものではない。

注

- (1) 拙稿「天平勝宝二年上巳の家持―春苑の桃李花と桜花―」『中京大学文学部紀要』30―3・4、H8・3。
- (2) 拙稿「大伴家持と仏教歌―天平勝宝八歳の修道・願寿歌を中心に―」『中京大学文学部紀要』32（特集号）、H10・3。
- (3) 小野寛「家持の依興歌」「家持の文芸―『春愁の歌』の誕生―」（『大伴家持研究』）
小野寛「大伴家持の依興歌追攷」『論集上代文学』13、S59・3。
- (4) 橋本達雄「二上山の賦をめぐって」『大伴家持作品論攷』塙書房、S60・11。
- (5) 橋本達雄「天平勝宝二年三月、出挙の歌」（『大伴家持作品論攷』）
- (6) 鉄野昌弘「『興』と『無常』―家持「歌日誌」への試論」（『上代文学』第72号、H6・4）
- (7) 辰巳正明より口頭に拝聴。
- (8) 拙稿「越中守大伴家持とホトトギス―歌友大伴池主を中心として―」美夫君志44、H4・3。（『大伴家持作品研究』おうふう所収）
- (9) 拙稿「鷹歌二首と大伴家持」美夫君志43、H3・10。（『大伴家持作品研究』おうふう所収）
- (10) 身崎壽「安積皇子挽歌 その（一・二）」『宮廷挽歌の世界―古代王権と万葉和歌―』、塙書房、H6・9。